

2001

第3回エフィル空間コンペティション
作品集

使い続けられる、こわされない家づくり

efil

大阪ガス

「Roof-scapes」

渡辺 治様 (渡辺 治建築都市設計事務所 主宰)
 橋場 保則様 ((有)スペースクリエイティブ 勤務)
 加茂下 喜人様 (渡辺 治建築都市設計事務所 勤務)
 クリストフ デファイ様 (AOKI 勤務)

高橋 鷹志様 (東京大学名誉教授・新潟大学教授)
 佐々木 勝年様 ((株)社会構造研究所 勤務)
 滝沢 啓太様 (千葉工業大学 在籍)
 オリビエ デファイ様 (AOKI 勤務)



経済本位体制下では、人の労働も含めて全てのものが貨幣に変換されて扱われます。貨幣で購入したものは「個人所有」となり「捨てる」ことに責任感はありません。特に日本人の簡単に捨てたり壊す意識は必要以上に家の寿命を縮めています。私達はその意識を、地球上で全てのものが共有であるという方向へ、建築するプロセスの中で修正できないかと考えました。

作り出すのは材料やエネルギーが皆の共有物であるという意識

躯体もインフラとして道路や区画と同時に整備供給してしまうというのはどうだろう。

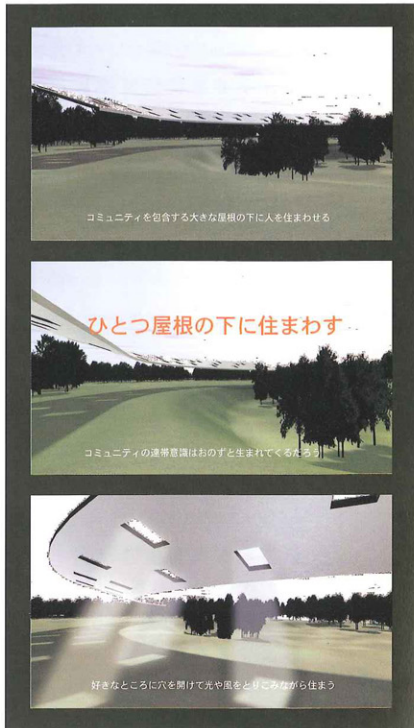
ひとつ屋根の下に住むことは全体の中の1戸であることを意識させる、それは環境を意識する始まり。

つくば市の中心から車でおよそ10分。周辺は森林が多く、対象の街区は約750区画を有する振興住宅地の中でビオトープに面する街区。敷地を訪れ、我々は新たに人工のビオトープを形成させることの困難さを知ることになる。周辺は森林が多く残り、そこで「都市内別荘」を洒落ることを思い付く。場所はつくば市内でありながら、周辺には人工であるが森林が濃い。都心で働き、自宅で別荘生活という趣向である。

原始の人たちにとって、各戸の家よりも家の配置の持つ意味は重要であった。通常は、コミュニティの在り方を色濃く反映していた。その時代に戻るのである。



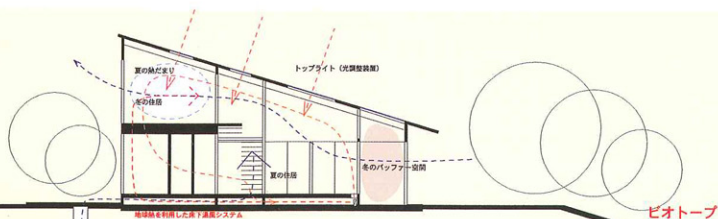
「ひとつ大屋根」といっても、実際には北側斜傾や、傾地に対するセットバック規定などの協定が存在しているので、許容される範囲で積方連続させた屋根を形成させる。屋根材や外壁や内部間仕切りは各自の自由であるので、好みの箇所にて穴を開けたり、閉じたりして住む。



〈審査委員評〉

ビोटープを囲みながら連続する木造住宅の単体を、道路などとともに都市のインフラとして整備しようという提案。都市を個別敷地に切り裂き、それぞれの敷地の中で閉じた世界を作ろうとしてきたこれまでの戸建て住宅に対する建設的批判としての意義を見いだすことができ、社会的視点からみた設計提案という側面を評価しました。また、住戸内部の各室を機能別に固定化するのはなく、家族一人ひとりが季節や個人の好みによって移り住むという住み方の提案は、居住史の再評価にも通じ、これからの住宅計画に示唆を与えるものであることから、複数の審査委員より肯定的評価を得ました。なお、こうした住み方を支える可動式のジャイアントファニチュアである現代版「ちゃぶ台」については、アイデアとしてはおもしろく、その意義を認める声も当然ありましたが、操作性を疑問視する意見もみられました。

一方、この作品は、明快でわかりやすい反面、全体的にやや荒削りなところがあり、つくば市、あるいは敷地周辺の地域性がどのように読み込まれているのか不明であることも問題とされました。また、インフラと呼ばれる木造の躯体や屋根の所有や管理の方法、建築構法やエネルギーシステムの構成、人と環境の持続的関係を維持するための具体的提案などが示されていないため、応募者がこのコンペで求められている課題に十分こたえているとは必ずしも言いきれないという声もありました。建築材料についても、なぜ輸入材に頼るのか説明が欲しいところです。(評/高田)



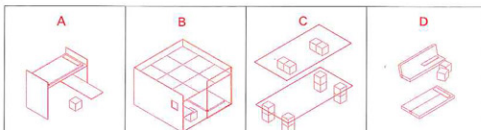
地下水による冷温水交換

住居内で移住しながら住む

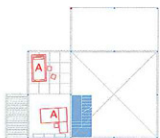
好むの用途(冬・夏)の部屋を選んで家族が家の中で移住する。建築費ががんばらねばならないのは、寒い時期のため定休日の熱取得が多く、熱損失を少なくし、暑い時期のため熱取得を少なく冷気の損失を少なくすること。年をとって階段がきつくなると1階に住むことも移住。

住居内移住を自由にさせる現代版「ちゃぶ台」

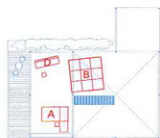
日本では、都市生活を小さな長屋に層を構えるようになってから、一つの空間を多様に使うことでその小さな空間に対応しようとした。朝起きたら布団をたたんで押し入れに収納する。朝食時には「ちゃぶ台」を出すことによってそれまで寝室だった空間がダイニング空間に変身し、「ちゃぶ台」を片付けることにより、何人も会合が可能なりダイニング空間にも変わります。そういった素晴らしい工夫を応用して、もっと大きな空間に子供たちや老人、そして客人が自由に空間を確保し、そして必要がなくなったらすぐにでも他の空間へと転用可能とするような装置:現代版「ちゃぶ台」を考えてみました。



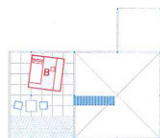
- A:子供「ちゃぶ台」は子供の勉強や作業及び寝るといった行為を許容(アフォード)する装置
 B:客人「ちゃぶ台」は客人や遊びが欲しい人が居住する装置
 C:会合「ちゃぶ台」は集まるしつ、会合しつする行為を許容する装置が変化する装置
 D:床座「ちゃぶ台」は畳つたり座敷人だといつた床に寝い行為を許容する装置



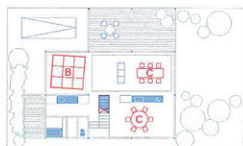
2F:子供2人と大人2名(「ちゃぶ台」)で寝る。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。
 1F:親2人が「ちゃぶ台」を寝て1Fの「ちゃぶ台」を使う。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。



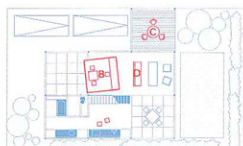
2F:成人1人と子供1人が寝る。1F:成人1人と子供1人が寝る。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。
 1F:親2人、成人1人と子供1人が寝る。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。



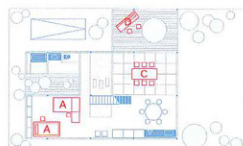
2F:親2人が「ちゃぶ台」で寝る。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。
 1F:2人が「ちゃぶ台」で寝る。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。子供は子供用の「ちゃぶ台」を使う。



幼児2+親2



成人子供1+親2



子供1+親2+老人2